

書 評

ラーマチャンドラ・グハ（著）、佐藤宏（訳）『インド現代史—1947-2007—』（上巻・下巻）

東京：明石書店、2012年、上巻 643 頁、8000 円 + 税、ISBN978-4-7503-3524-7、下巻 627 頁、8000 円 + 税、ISBN978-4-7503-3525-4

中津雅昭

本書は、高名なインド人歴史家・作家として知られるラーマチャンドラ・グハ（Ramachandra Guha）の著作 *India after Gandhi: The History of the World's Largest Democracy*. London: Macmillan, 2007, xxvi+900 pp. の邦訳本である。本書及び原著のタイトルが示すように、約半世紀前の分離独立及びマハトマ・ガンディー暗殺から現代までのインド政治史を扱っており、世界最大の民主主義国インドの苦闘の歴史を描いた大著である。このような巨大というべき論題に取り組み、見事なまでにインド民主主義の実践と苦難を捉えた業績は極めて少ない。本書では、独立後の経済・社会・文化領域での発展をもインド政治史の中に巧みに織り込みながら、インド民主主義の発展や変容過程を再検討するという従来ではほとんどみられない挑戦的かつ野心的な試みがなされている。ゆえにインド内外において大きな反響を呼び多くの論評がなされる話題の一書ともなった。

本書の目的は、1. 独立当初より国家の分裂につながり得る社会的な対立・紛争に直面し、また様々な政治勢力からの挑戦に晒されながらも、インドはなぜ統一された一つの政体（国民国家）として存続しえたのか、2. 広大な国土、膨大な人口、言語・宗教・カーストに基づく多様で複雑な社会構造を有し、無数の貧困層や非識字者を抱えるインドにおいて、民主主義がいかにして生存・保持されてきたのか、という2つの主題を解明することにある。欧米のみならずインド国内でも、独立後のインドの国家統一や民主主義の維持に関して懐疑的な憶測が絶えずなされ、首相の死去や分離主義運動の激化のたびに、統一体としてのインドの解体・終焉、また権威主義体制や軍事独裁への移行が予言されてきた。本書で度々登場するインド破滅論者の多くは、文化的な異質性と貧困を理由に、インドが国家統一も民主主義の維持もできないと声高に主張してきたのであった。グハは、こうした予言に挑むかの如く歩んでいくインドの政治発展の要因とプロセスを叙述している。

本書は5部30章にプロローグとエピローグを加えた構成であり、本文だけでも1000頁を超える大作である。上巻にはプロローグから第3部までが、下巻には第4部からエピローグまでが収録されている。また、上・下両巻の冒頭に原著で使用された写真が掲載されており、本書の主要な登場人物や各時代の重要な出来事の模様が映されるこれらの写真には、著者の見解が記された説明文が付されている。また各章には、原著にない副題が訳者によって書き添えられており、これにより各章の中心的なテーマが明示され、特定のテーマに関心にある読者にとっても手に取りやすいよう工夫がなされている。

本書の構成に関わる特徴は次の3点である。第一は包括的な歴史記述がなされている点である。言語に基づく紛争、宗派間での緊張・暴動、経済格差などにより、独立後のインドが混沌と激動に覆われる中、本書では政治、経済、社会に関する主要テーマが的確に選り出され、著者の一貫した主張に基づき理路整然と叙述されている。膨大で捉え難いインド現代史の実相を踏まえれば、こうしたグハの試みは偉業といえる。また、グハは中央政治のみならず地方政治の歴史にも大きな関心を払っている。例えば、カシミール人指導者シェイフ・アブドゥラー、タミルの映画俳優から政治家に転身したM・G・ラマチャンドラン、ナガの分離主義運動の指導者フィゾ等のカリスマ的な地方指導者の姿を通じて、インド民主主義における地方政治の歴史と役割が鮮明に描き出されている。加えて、本書では政党及び政治指導者に焦点を当てた歴史記述が中心的であるが、他方で女性、部族民、労働者といった多くの場合で周縁に位置付けられる階層にも着目することで、インド民主主義の諸相が多岐にわたり論じられている。

第二の特徴は引用資料の豊富さ及び新しさである。前述の包括的な歴史記述は、インド、英国、米国で収集されたあまりに膨大な一次資料と二次資料に徹底して支えられており、読者はその豊富さに圧倒されるに違いない。同時にグハは、インディラ・ガンディーの側近であったP・N・ハクサルが所蔵していた個人文書等の新しい一次資料を用いて、インド現代史に関する新鮮な洞察と重要な理解を提示している。またグハは、回想録や各時代のインド内外のジャーナリストらによる論評を頻繁に引用し、時代毎にみられる歴史の息遣いともいえるべき様相を鮮やかに描き出している。ただし、1990年代から現在まで扱う第5部では、グハ

が同部を「歴史を通じたジャーナリズム」（下巻298頁）と認めているように、インド内外の英字新聞やジャーナルといった二次資料が広範囲に使用されており、90年代以前まで（とりわけネルー政権期）の記述にみられる一次資料を巧みに駆使した分析的な歴史記述は限られている。

第三は流暢で明快な文体での叙述である。喧噪に満ちた過去60年間の出来事を注意深くかつ綿密に描く本書は非常に長大ではあるが、平易で流れるような文体で記述されているため、読者にとっては大変に分かり易く読み易い。こうした書きぶりには専門家ではない幅広い層にも訴え掛けようとする著者の意図が明白に表れている。またそうした著者の意図が反映された訳者による訳注では、インド史の基礎事項や現在のインドの状況との接点や関係が解説される等、読者の内容理解のために細やかな配慮がなされている。本書は明快かつ活力に溢れる文体でインド現代史を思慮深く検討しており、読者は読み進めるうちに自然と著者の歴史記述に惹きつけられていく仕上がりとなっている。

本書の内容が長大であることを勘案し、以下では各部の主要事項を主題との関連から簡潔に指摘する。最初にプロローグ「不自然な国」では前述の本書の目的や背景が記されている。グハは「現代インドの真のサクセス・ストーリーは、経済ではなく政治の分野にこそある。（中略）インドが独立後60年してもなお単一の国であること、またインドがそれなりに民主的であること、これらの事実、私たちはもっと深く注意を払うべきである。」（上巻25頁）とし、インド民主主義の史的展開を詳察する意義を強調する。政治領域に注目するグハの姿勢は、インド経済史を扱う章が僅か2章分（第10章、第29章）にとどまっている点からも明らかである。また、ネルー時代の記述が本書のほぼ半分を占めていることが示すとおり、グハはインド民主主義の発展においてネルー時代の功績を最も重視している。

第1部「破片の寄せ集め」は、英国統治の残骸の中から新生国家インドの輪郭が形成されていく激動の時代を主要なテーマ（藩王国の統合、憲法制定等）ごとに描写する。グハは、独立後のインド政治におけるガンディーの死の本質的な意味をヒンドゥーとムスリムの宥和の失敗ではなく、暴動への対応をめぐる対立を深めていた二大指導者、ネルーとヴァッラブバーイー・パテルの関係を修復させた点に見出している（第1章）。また、カシミールの帰属をめぐるネルーの苦悩や立場の移り変わ

りが、妹宛ての手紙やカシミール藩王への書簡を通じて微細に説明されている(第4章)。第1部にて何より秀逸なのが、宗派暴動、洪水のような難民の流入、飢饉、階級間での紛争といった困難な状況下で、制憲議会での白熱した討議を経て起草・制定されたインド憲法に関する記述である(第6章)。インドの多様性を背景とした数多くの反目し合う主張と要求が制憲議会で繰り返される中、国家理念とその制度的なメカニズムの外形を規定した憲法が、外部のいかなる圧力も受けることなく、インド人自身によって制定された点をグハは称賛する。

第2部「ネルーのインド」では、50年代にネルー政権が直面した試練、独立後のインドのイデオロギー(社会主義、非同盟等)が説明されている。ナガの分離主義運動に関する解説は目新しく(第13章)、ヒンドゥー家族法の改正(第11章)はこの時代の試練の一つではあるが、より重大な試練として特筆すべきは、第1回総選挙(第7章)と言語別州再編成(第9章)である。前者に関し、グハは官僚が果たした役割を高く評価する。彼らは1億7000万人以上の有権者の登録、膨大な非識字者への対策、選挙用具の調達等の途方もない準備作業に着手し、概ね平和裏に選挙を実施した。初代選挙委員会委員長は総選挙を「人類史上における民主主義の最大の実験」(上巻235頁)と指摘したが、これは大袈裟な表現ではないであろう。また政党による選挙キャンペーン、ネルーの個人的名声を映し出す大衆の熱狂、投票を初体験する有権者の様子が活気に満ちて詳述されている。後者の言語別州再編成に関して、グハは、言語州の創設がインドのバルカン化を引き起こすとのネルーらの懸念を克明に紹介した上で、言語的な多様性を尊重する州再編成によってインドの国家統一はむしろ強化されたと主張する。

第3部「揺らぐ中央」は、ネルー体制が国内外からの挑戦により動揺し、彼の死去に伴い終焉する過程を叙述する。グハは、ケーララ州の共産党政権を解散させることに逡巡していたネルーの心境や、解散決定がネルーの名声を傷付ける結果となった点を指摘する(第14章)。またグハは、国境線をめぐる中国との関係悪化と戦争を検討する(第15章)。公式には非公開のネルー・周恩来会談の記録をハクサルの文書を基に紹介し、中国側から東部地域と西部地域の実効支配に関する交換取引が提案された点を示す。さらに、カシミール問題解決の糸口を探るネルーの晩年の苦悩と闘いをグハは迫力をもって描く(第16章)。ただしネルーの

影響力に陰りがみられた当時の状況では、いかなる解決策が打ち出されようとも、インド国内とくに会議派や議会の同意を取り付けることは困難であったとグハは結論する。

第4部「ポピュリズムの興隆」では、インディラ・ガンディーの登場から会議派による一党優位体制が終焉する1989年のラジーヴ・ガンディー政権崩壊までがほぼ通史的に記述されている。インディラ時代の政治に関して、グハは、議会制民主主義における野党の存在、議会での審議、官僚や司法の独立性、党内民主主義等を尊重したネルーの政治とは対極に位置付け叙述する。とりわけ非常事態は、会議派分裂以降に中央集権化を強めるインディラの政治が深化した結果と断じる（第22章）。グハは、地域政党、ヒンドゥー・ナショナリズム勢力、会議派内部からの深刻な挑戦を前に、ラジーヴがインディラと同様にポピュリズムに傾斜していく様相を叙述する。そして混乱と暴力が吹き荒れた80年代を「激動の10年」と評価した上で、そうした激動をインド政治における「単一の地域（北部インド）、単一の党（会議派）、そして単一の家族（ガンディー家）による支配からの脱中心化の進行」（下巻298頁）とも解釈する（第25章）。また外交面では、1971年の印ソ平和友好条約を提案したのがソ連側であったという通常の歴史理解とは異なる見解を提示する（第20章）。

第5部「事件の記録」では90年代以降のインドがテーマ別にカバーされている。注目すべきは、グハが現代インドを「ポピュリズム的民主主義」と表現している点である（第28章）。グハは、低カーストの政治参加や影響力の拡大を歓迎しつつも、ポピュリズム的な民主主義の危険性に警鐘を鳴らす。またグハは、人々の娯楽がインド社会に及ぼす影響についても考察する。とくに現代インドのアイデンティティ形成や統一における映画の役割を強調している点はユニークである（第30章）。

エピローグ「インドが生き残る理由」は本書の結論部分にあたる。ここでグハは、インドが植民地統治の遺産（官僚制、軍、英語）を継承しつつ、宗教的及び言語的多様性を保持する形で国家統一と国民統合を概ね達成したと総括する。また、政治家や政治組織の劣化を理由にインド民主主義の適正度を50%としながらも、独立後のインドが、西洋の経験や政治理論とは異なる民主主義を独自で育成・発展させてきたと称賛する。そしてグハは、ネルー、パテル、B・R・アンベードカルのよ

うな知力と人格を備えた稀有の指導者たちが同時代に長く生存した点を幸運であったとし、インド民主主義の育成段階における彼らの功績を高く評価した。

傑作というべき本書にもいくつかの課題がある。著者は、自らが民主主義の「ハードウェア」と表現する民主制度の確立や定着についての考察に重点を置くあまり、民主主義の機能面すなわち民主主義が現在のインドに何をもたらしたのかという点に関する検討が不十分である。確かに著者はインド民主主義を手放しで賛美しているわけではない。また著者が論じている、インドにおける政治参加の拡大や選挙で選出された政府への正統性の共有はインドに民主主義が根付いている証左といえる。しかし、現在もなお顕著に残存する経済格差や貧困、社会的不正とといった課題の克服に対し、著者はインドの民主主義がどの程度有効であったのかを十分に明示していない。著者は、インドの統一は今日までに80%ほど達成したと主張するが、残りの部分にみられる毛沢東主義革命運動やカシミール分離主義運動といった過激派運動の継続・激化には上述の経済・社会的な課題の影響が多分にあるのではなかろうか。

また、グローバル化する現代インドの諸相を射程に収められていない点も課題である。資料の入手や近年の事件への冷静な評価は確かに困難を伴うが、グローバル化の進展とともにインドへの関与を強める在外インド人の政治・経済活動が扱われていない等、現代インドが伝統的な国家の枠組みを越えて急速に外部世界との関係を緊密化させているというダイナミックな変化が本書では描かれていない。80年代後半にはすでにその萌芽がみられる、「インドのグローバル化」という新たな局面が、インドの統一や民主主義にいかなる影響を及ぼし得るのかという点に関し、少なくとも何らかの展望や示唆を著者に求めるのは評者の行き過ぎた期待であろうか。

個別テーマに関していえば、第27章「暴動」で扱われるヒンドゥー・ナショナリズムに関する検討が淡泊であるという印象が拭えない。著者は、ヒンドゥー・ナショナリズム勢力の大衆動員戦略やそれに伴う大規模な宗派暴動を記録としての記述に留めるがあまり、独自のイデオロギーに基づき政教分離主義に再定義を迫る同勢力がインドの政治・社会に及ぼす影響について十分な関心を向けられていない。著者が指摘するように確かにインドは理論上では政教分離国家である。他方、多数派主



義的な性向をもつ同勢力は、依然としてインドの様々な階層で一定の影響力を保持しており、同勢力によるムスリムやキリスト教徒といった宗教的マイノリティへの暴力や排除も止んでいない。こうした現状に照らせば、同勢力の特性及び政治動向をより注意深くかつ詳密に解析する必要があると思われる。

上述のような批判はあるものの、それらはインド政治史の奥深さや幅広さを絶妙に表現する本書の価値を少しも低下させるものではない。著者の熱意に溢れるこの労作はインド現代史に関心のある読者に多くの知見と新鮮な驚きを与えるはずである。ゆえに研究者や専門家に限らず、そうした広範な読者にとっても必読の文献のひとつとなるであろう。

なかつ まさあき ●大東文化大学非常勤講師